

距離の取り方

李 恩 子

今年の「母の日」の朝、以下のようなメールを受け取った。

Mother hold their children's hands for a short while, but hearts forever. Happy Mother's day!

短いこの文章をずっと読み終えた瞬間、何の意味が込められているのかわからなかった。もう一度、読み直し、「親」としての自身を省みた。どれ位娘を傷つけてきただろうかと思いながら、まったくその通りだと納得した。一方でメールを送る、あなたはどゆなのと尋ねたい衝動にもかられた。しかし、よくよく考えてみると、感謝の意の表現になるHappy Mother's Day!を送ってきたのだから、私に反省を促すためでないことは明白である。むしろ、送る側も自分の子供を傷つけてきたことに反省していることを伝えたい、あるいは共有したいという意思表示だったのかもしれないとも思った。

いずれにしろ、親子間だけではなく人は、残酷にも互いを傷つけて生きていることが多いのではないかと思う。意図せずしてであっても結果的に傷つけることがよく起こる。親子、兄弟姉妹、友人、同僚、教師と学生、恋人、諸々の関係性の中で、時には意識的に時には無意識的に他者を傷つけてしまっている。互いを傷つけあいながらも一方で、それぞれの関係性はとっても貴重で大切である。だからといって失われた関係性は戻らない。だが、傷ついても、更に傷ついてもそこに「愛情」があれば、容易なことではないが、関係性の回復も可能なのかもしれない。

大阪の釜ヶ崎で日雇い労働者と共に生きてきた本田神父は「愛する」ということは他者を大切にすることだという。つまり、他者の存在を認め尊重することだというのだ。それを「愛情」の一つの定義とすれば、傷つけ合うという消耗する行為は少しは抑えられるのかもしれない。また、傷つき合わないためには、やはり、互いの距離の取り方であろう。「親しき中にも礼儀あり」とはよく言ったものである。もちろん日本という文化的文脈でのことであるが、距離の置き方はある種普遍的な課題かもしれない。どのような関係性であっても適度な距離を取ることは互いの成長のためにも必要のようだ。

Bette Midler の "From a Distance" という歌の中にGod is watching us from a distance という歌詞があるが、それぞれの関係性における距離の取り方を考え、同時に神は私たちが意識しなくても常に、同じ距離で私たちを見守っているという感性を持ち続けたいものである。

(宣教師、国際学部教授)